

難聴児のグループ療育における保護者支援について

Family support for hearing-impaired children in group therapy

和泉 千寿世¹⁾・千葉 真実¹⁾・佐竹 恒夫¹⁾

Izumi Chitose, Chiba Mami, Satake Tsuneo

1. はじめに

当センター難聴幼児課（難聴幼児通園施設）での難聴児の療育プログラムは個別療育と個別面談（毎週）、グループ療育とグループ面談（毎週）、保護者の交流や障害に関する情報を提供するための保護者教室、行事等（毎月）を柱に実施している。グループ療育の目的は、個別療育よりも日常生活に近い場面で親子の共同活動を通し良好なコミュニケーション関係の育成と、子どもの興味・関心を拡大し言語発達を促進することである。療育を行う上で保護者支援は大きな柱であり面談は重要な役割を占める。本報告では、4歳児に行った「お菓子作り」活動での保護者支援について一症例の経過を報告し考察する。

2. 対象

4歳児グループメンバーを表1に示す。男4人、女2人の計6人である。医学的診断名は感音性難聴で、平均聴力レベルは良聴耳46～79dBである。難聴診断年齢はC A 1ヵ月～3歳5ヵ月で、6名の内2名は新生児聴覚スクリーニングで発見された。当センターでの療育期間は6ヵ月～3年である。

2.1 症例

4歳女児（症例A）。診断名は両側感音性難聴で平均聴力レベルは右81.3dB、左76.3dB（図1）である。

表1 対象

症例	聴力 (良聴耳)	難聴診断 年齢	療育開始年齢 (リハセンター)
A	70～80dB	3歳5ヵ月	3歳7ヵ月
B	55dB	1歳4ヵ月	1歳4ヵ月
C	50～60dB	2歳4ヵ月	2歳5ヵ月
★D	60～70dB	0歳1ヵ月	1歳0ヵ月
E	80～90dB	3歳4ヵ月	3歳8ヵ月
★F	80～90dB	0歳2ヵ月	1歳1ヵ月

★新生児聴覚スクリーニングで発見

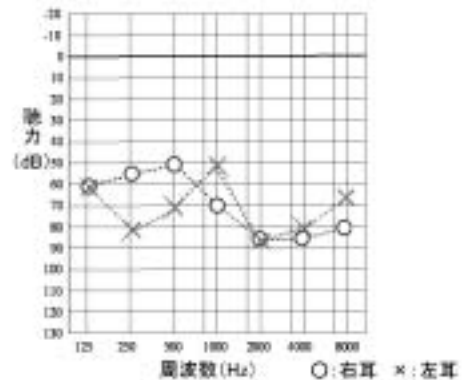


図1 A児のオーディオグラム

2.2 生育歴

周胎生期異常なし。39週、3314gで正常分娩にて出生。定顎3ヵ月（以下0：3と表記）在位0：6、独歩1：5であった。家族歴は特になし。

2.3 相談歴

4ヵ月健診は通過。1歳6ヵ月健診で未発話のため電話フォローを受ける。3歳児健診で言語発達の遅れがありB療育センターを紹介される。3歳5ヵ月B療育センター耳鼻科で難聴の診断を受ける。3歳7ヵ月に当センター耳鼻科を受診し難聴幼児通園施設入園した。

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター
発達支援課 第三療育係

2.4 療育開始時の評価

言語発達は<S-S法>言語発達遅滞検査で受信(理解)発信(表現)面ともに1歳半レベル、動作性課題は年齢相応であった。

3. 方法

「お菓子作り活動」は2007年4月～7月まで週1回、9セッション実施した。プログラムは午前10～12時まで約2時間親子でお菓子作りを行い、12時から母子分離し、子どもは給食、その後サブリリーダーが製作や集団ゲームなどの活動を行った。保護者は昼食後リーダーの言語聴覚士(以下ST)が1時間～1時間半グループ面談を実施した。保護者の発言はリーダーのSTが筆記し記録した。面談は各親子のコミュニケーション関係を軸に保護者が自分の行動を振り返ることができること、保護者同士の相互学習、保護者同士が助言しあい課題解決がはかれること、を目的とした。

4. 結果及び考察

4.1 家庭での準備活動におけるA児保護者の変化

家庭での準備活動における変化は前期・中期・後期の3期に分けられ表2に示す。活動開始時のA児保護者は療育開始からまだ8ヵ月で、精神的に不安定な状態であった。家庭で調理道具の準備はA児保護者がすべて行っていた。1～3セッションの前期はSTの助言により子どもと一緒に前日に準備を行うようになった。4～6セッションの中期は、他の保護者の意見や助言を取り入れ、子どもが道具等を捜しやすいように棚に絵と文字を貼り、子どもの未習得語彙を絵日記に書き加えた。7～9セッションの後期は、なぞなぞをしながら準備をするなど子どもが楽しく、興味を持てるように自発的に工夫するようになった。

4.2 A児保護者の面談での発言の変化(図2)

前期はSTからの指名で発言していた。発言内容は「他の保護者と同じ気持ち。面談では本音と言える」と、他の保護者に共感し気持ちの安定が図れてきた。中期は他の保護者の意見や助言を受けた発言が多くなった。他の保護者から「道具や手順がよくわかっている」と子どもの行動をほめられ、「繰

表2 家庭での準備活動におけるA児保護者の変化

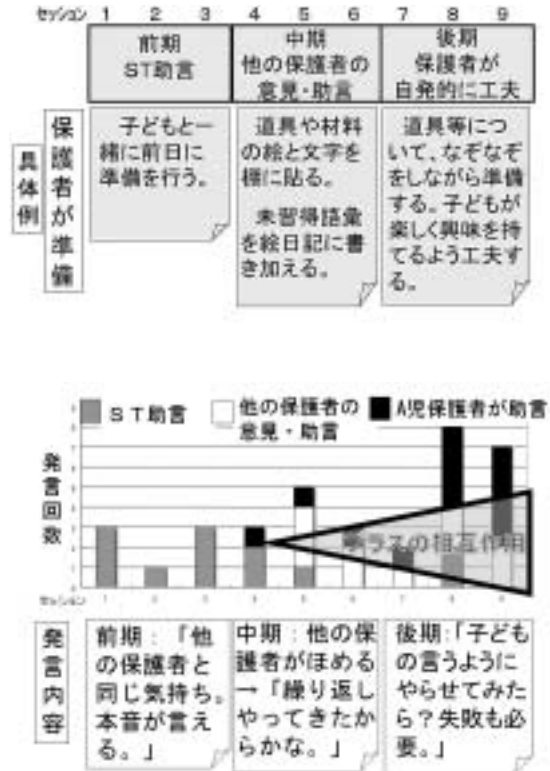


図2 A児保護者の面談での発言の変化

り返し家でやってきたからかな」と家庭での活動の成果に自信が持てるようになり、他の保護者からのプラスの作用が見られた。後期は「子どもの言うようにやらせてみたら、失敗も必要」と自分の経験から他の保護者に助言する回数が増え、A児保護者から他の保護者へプラスの作用が見られた。

4.3 活動終了後のA児保護者のグループ面談についての感想

活動終了後のA児保護者は、STについて「子どもへの対応の仕方や面談での話からなるほどと思うことが多い」、他の保護者については「本音可言え、学ぶことが多く、尊敬できる人ばかり」さらに「活動終了後は、面談後にも親同士で話しあうようになった」と感想を述べた。

4.4 STの対応とグループ保護者間の変化(図3)

活動開始時、A児保護者は療育開始からまだ8ヵ月で、ショックが大きく、不安定な状態であった。前期、STの対応は、保護者に個別に助言を行い、A児保護者はSTからの指名で発言していた。その中で他の保護者への共感と安心感が芽生えた。面談はST主導で行った。中期、STの対応は、他の保

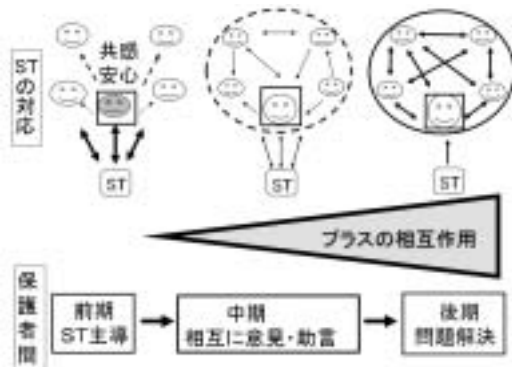


図3 STの対応と保護者間の変化

護者の課題も自分の課題と照らし合わせ、考えられるように保護者全体へ助言を行った。A児保護者は他の保護者の意見や助言を取り入れ、子どもの成長を実感し、自信を持って子どもとの活動を行うようになった。保護者間では自分の悩みや不安を語り合い、相互に意見や助言を取り入れる姿勢が形成された。後期、STの対応は、保護者間の話題の方向付けを行った。A児保護者は他の保護者に自発的に助言を行うようになり、自分で問題解決する方策を身につけ、保護者間では互いの問題を解決し合うようになった。このことから保護者間に互いの問題を共有し、解決を図るプラスの相互作用が形成されたと言える。グループ面談では、個々の保護者とグループ全体の特性を考慮しながら、STは段階的に面談を進め、保護者間のプラスの相互作用を形成するように働きかけることが有効と考えられた。

5.まとめ

難聴の4歳児グループの「お菓子作り活動」での保護者支援について

- (1) 1症例(A児)のグループ面談での経過を報告し、保護者が準備活動を子どもが楽しめるように自発的に工夫し行うようになった経過を示した。
- (2) また、A児保護者のグループ面談での発言の回数と内容の変化からグループ保護者間でのプラスの相互作用が形成された経過を示した。
- (3) グループ保護者間でのプラスの相互作用を形成するにはSTは面談を段階的に行うことが有効であった。段階は、1) ST主導で個々の保護者に助言する、2) 他の保護者の問題も自分の問題として考えられるように保護者全体に助言を行う、

3) 保護者が互いに助言を行えるように話題の方向付け、である。

新生児聴覚スクリーニングの実施により0歳で難聴が発見され、療育につながるケースが増え、当課では2005年度から0歳から週1回のグループ療育を開始している。今後も継続して就学までの5年間を見通してのグループ療育のプログラムの開発・検討を行い、より良い保護者支援のあり方を考えていきたい。

〔第9回日本言語聴覚学会

(2008年6月22日~23日、栃木県宇都宮市)にて発表〕

参考文献

- 1) 足立さつき 他：STによる家族支援(発達障害児の親同士の交流)。言語聴覚士のための言語発達遅滞訓練ガイドンス。医学書院，pp 292 - 295，2004
- 2) 中津愛子 他：難聴幼児の家族の障害認識と家族に対する子育て支援。第50回日本音声言語医学会総会・学術講演会：107，2005